
残酷な運命の中の光

亜矢歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残酷な運命の中の光

【Nコード】

N7274M

【作者名】

亜矢歌

【あらすじ】

外道衆達との戦いは、まだ続いていた・・・。

そして、丈瑠、流之介、真子、千秋、ことはの6人の絆は深まっていた頃新たな試練が！

丈瑠の前に現れた謎の女の子はいったい誰なのか！？

がんばれ、シンケンジャー！！

プロローグ

ここは、外道衆達がいる三途の川……。
ここから、隙間を通って人間界に出て人間を襲っていた。

三途の川岸のところに小さな女の子がいた。
なぜ、こんな小さい子が三途の川にいるのかは、また先の話……。

「ハアー……ハアー……深夏……深夏！！……ハアー……
夢か」

この、男は芝丈瑠。芝家18代目の当主だ。
丈瑠は今の夢を見て胸騒ぎがした。今頃になって、また深夏の夢を
見るなんて何かあるとしか思えなかった……。
だが、丈瑠はすぐその考えを捨てた。深夏の夢を見ただけだ、何も
起きない、そう思っていた。
でも、その考えはすぐに絶望に変わる……。

1話（前書き）

やっと続きがかけます!!!

すいません、長い間書かなくて・・・。

これからは、ちゃんと書くんでよろしくお願いします!!!

ちなみに、元太は出てきません。オリキャラのある女の子が出てきます。（正体はマダひみつ）

1話

「おい、シタリ！三途の川が全然増えてねえじゃねえか！！」

「おかしいねえ。確かに、いつもシンケンジャーが邪魔してるけど、三途の川は増えてたんだけどねえ」

「ちっ！どう言う事だ！！」

ドウコクが苛立つ横でシタリは考えていた。

三途の川が増えていたのは確かなのに、減るとは、考えられなかった。

確かにドウコクの言うとおりだ。何かおかしいねえ。

一度調べてみたほうが……。

そんな考えがシタリの頭の中に渦巻いていた

次第にドウコクの怒りは頂点にたっし暴れ始めた。

「落ちてけドウコク！」

だが、ドウコクは太夫の言うことは聞かず暴れる一方だった。

そんなドウコクを見かねたシタリは、ナナシ達に酒を持ってこさせた。

「しかし、気になるなら誰か送り込んでみるか？」

「だが、いい奴がつかばなくてねえ」

「ふん。そんな奴あいつだけだろうが」

「おや、聞いてたのかい」

さつきまで、酒を飲んでたドウコクが話を聞いているとは思えなかったのだ。

「で？あいつって言うのは？」

「決まってるだろうが。シンケンレッドの妹だよ」
と、不適に笑いながら言った。

1話（後書き）

いや〜うまく書けたかなあ。

これを読んでくれた人、なにかアドバイ스가ほしいです！！
よろしくお願いします！！

？「亜矢歌、俺達の出番はいつなんだ？」

亜「た、丈瑠・・・えつと・・・それは・・・」

丈「早いとこ出せ。千秋達がうるさくて仕方ない」

亜「はい・・・」

丈「頼むぞ」

亜「うん！え〜と、次回はシンケンジャーの皆が出てきます」

亜、丈『皆、読んでね〜！！』

2話（前書き）

なかなか、投稿できなくてごめんなさい！！

？「ホントだぜ、亜矢歌」。早く俺ら出してくれよ」

亜「ち、千秋・・・」

？「私も、早く出してほしいんだがな。」

亜「流ノ介・・・」

千、流「「なあゝ亜矢歌」」

亜「・・・第2話始まるよー！！」

千、流「「こらゝ！！」」

2話

ここは、芝家。侍の皆は、戦いが終わるまでここで過している。もうすぐ朝食みたい……。

「あゝ腹減った」

「あたしも」

「もうすぐ、出来る見たいや」

「それまでの辛抱だぞ、二人とも！」

「分かつてるわよ」

この四人は、千秋、流ノ介、麻子、ことはだ。

四人ともシンケンジャーとして、丈瑠とともに戦っている。

「お、殿はもう来てるぞ」

流ノ介が言ったとき、いつもなら気づくはずの丈瑠はどこか一点を見つめたままじっとしていた。

「殿様？」

「おゝい、丈瑠……！」

千秋が、大きい声で呼ぶとやっと気づいたように、丈瑠が千秋たちを見た。

「……なんだ？」

「なんだ？」じゃねえよ。さっきから呼んでただけど？」

「ああ……悪い……」

丈瑠は、心ここにあらずといった感じだった。

「丈瑠の奴どうしたんだ？」

「何か、考え事してるみたいだけど……」

何だったんだ？あの夢は……。深夏はいないんだ。なのに、何でいまさら……。

「コホコホ、コホコホコホ！」

「殿様！？大丈夫ですか？」

丈瑠がずっとボクとしているのを心配していたことは、丈瑠が咳をしたのを見て、風邪を引いたのではと心配して声をかけたのだ。

「大丈夫だ。少し咳が出ただけだからな。」

「よかった……。」

「ありがとな、ことは。」

丈瑠に言われ、照れてしまったことはを見ていた丈瑠はつい顔がほころんでしまった。

一番、年下のことはを丈瑠はつい、妹と重ね合わせてしまうのだ。

「何か、大丈夫みたいね、丈瑠。」

「ああ。もういつもの通りだ……。しかし、さっきの殿はいったいどうしたんだ？」

「昨日は普通だったよな？」

「まあ、丈瑠は話してくれる様な人じゃないでしょ。待ってればいいじゃない。」

「だな。」

そんな事を話していた時、隙間センサーがなった。

「34番、香澄町」

「よし、行くぞ！」

「……はい……」

香澄町

丈瑠達が行ってみると、案の定、ナナシたちが町で暴れていた。

「そこまでだ、外道衆！」

丈瑠が言い、シヨドウフォンを出した。

「『筆清浄！はあ！』」

「シンケンレッド、芝丈瑠」

「同じくブルー、池波流ノ介」

「同じくピンク、白石麻子」

「同じくグリーン、谷千秋」

「同じくイエロー、花織ことは」

「天下御免の侍戦隊」

「『シンケンジャー！参る！』」

そして戦い始めた、丈瑠達を見つめる一人の女の子がいた。

「やっぱり、お兄ちゃん・・・殿様になったんだ。あんなに嫌がってたのに・・・」

「シンケンマル、烈火大斬刀！ハア〜ハア！」

丈瑠が、ナナシをなぎ倒し戦いは終わった。

「やっと、終わった〜。ナナシ多すぎだろ」

「でもナナシだけだったんだから、よかったじゃない。・・・あ〜」

お腹すいた〜」

「そう言えば、朝ごはんまだだったな。」

「よし!!!早く帰ろう!!!殿、帰りましょう!!!殿?」

そこには、膝をついて息を荒げていた。

「どうした、丈瑠。おい、た・・・」

「ゴホゴホゴホ、ゴホツゴホ!ハアー・・・ハアー・・・ゴツホ!
!」

フラ・・・トサ

「丈瑠!!!!こいつ・・・スゲエ熱だ・・・」

丈瑠は、千秋の言葉を遮るように千秋に倒れこんでしまった。

「大丈夫ですか、殿」

「ああ・・・悪い・・・」

「殿様、ごめんなさい!!!うちがあの時気づいてれば・・・!!」

「ことはの気にする事じゃない・・・」

「でも・・・」

「大丈夫だから・・・」

丈瑠の顔は、熱の所為で真っ赤だったが微笑んでいた。
それを見た、ことはの顔にも笑顔が広がった。

「とにかく、帰ろう。丈瑠の事も心配だしね」

「うん!!!」

皆が帰ろうとした時、幼い少女の声が聞こえた。

「そうは行かないよ、シンケンジャー!!!」

2話（後書き）

果たして、この声は誰なのか！！

そして、ついに文瑠の過去の一部が明らかに！！

次回をお楽しみに！！（笑

3話（前書き）

やっぱり、受験生だとなかなか投稿出来なくてだめですね・・・。
でも、しっかり話は書いていくんでこれからもよろしく願いしま
す！！

さてさて、次は謎の少女が現れてからの話です。

注）丈瑠と千秋の話がいつか出てきますが、BLではないので、大
丈夫です！

では、どうぞ！！

3話

「貴様、何者だ！」

突然現れた、少女に流ノ介が、声を荒げた。

だが、流ノ介だけではなかった。

麻子もことはも千秋も、あの丈瑠でさえ、気配すら気づけていなかった……。

そのため、皆驚きを隠せないでいた。

「ちょっと、ちょっと。驚きすぎでしょ。」

そんな顔を見て、少女は、あどけない顔で笑っていた。

「だから、お前は何もんなんだよ」

千秋が戸惑いがちな感じで聞くと、少女は笑うのをやめた。

「別に名乗るもんじゃないよ。でも……」

そう言った所で、少女の顔が微かに曇ったのを丈瑠は見逃さなかった。

「私は生きて外道に落ちた。……とだけ、言っておこうか」

「生きて……外道に……？」

麻子は信じられないと言った顔だった。

ことはも、悲しそうな顔で見つめていた。

「なんだ？その顔……。同情はやめてよね！今日は、挨拶代わりだ！志葉の殿様！ハア！」

「……うわあー！！」「」「」

少女の、急な攻撃に不意をつかれて千秋たちはまともに攻撃を受けてしまった。

「お前達!!」

「次は、志葉の殿様だよ」

文瑠は、少女が近づいてくるのを見て、シヨドウフォンを構えた。

だが文瑠は、少女にどことなく違和感を感じていた。それは、あの少女がはぐれ外道衆だからかは、分からなかった。だが、ひとまず文瑠は戦いに専念することにした。

「一筆相乗!ハア!」

ガキイン

文瑠が、振り下ろした刀は少女に防がれてしまった。

しかし、刀が交わったときに文瑠が感じていた違和感はいつそう増していた。

「お前・・・なんだ?外道に落ちたといっても、ほかの奴らとは根本的に違う・・・」

そう。文瑠は、この少女にモジカラを感じていた。

「・・・なんだ?この、モヤモヤした感じは・・・。俺はいつたいこいつに何を恐れているって言うんだ・・・」

文瑠が、そんな事を考えているとを考えると、少女は不気味にほくそえんだ。

「ふん。さすが*****。」

「・・・なんだ?今なんていったんだ?・・・」
文瑠が、そんな考えに囚われた瞬間を狙って少女が一気に近づいた。不意をつかれた、文瑠は攻撃を受けてしまった。

でも、丈瑠はまだ意識があった。

そんな、丈瑠の横を通りすぎたとき少女から、丈瑠にとって、懐かしいにおいがした。

.....この匂い・・・まさか・・・深夏・・・

そして、丈瑠の意識は途切れた。

4話(前書き)

久々の投稿です。

これからは、なるべく早く投稿しようと思っているので、よろしく
お願いします！

4話

「久しぶりに会ったけど・・・元気そうだったな、お兄ちゃん・・・」
少女は、ビルの屋上から海を見つめながら、つぶやいた。
その目はどこか悲しそうで・・・だけど憎しみを含んだ目をして
いた。

お兄ちゃん・・・どうして？何であの時私の事を・・・？守ってく
れるって言ったじゃない！

私は、お兄ちゃんが好きだったのに・・・お父様も・・・皆許さない！
こんな世界なんて、要らない！！

「だから、お兄ちゃん・・・？今度こそ殺す」
さっきまでしていた、悲しい目はなく、憎みだけの目をしたその少
女は、静かに去っていった。

「文瑠の奴まだ目、さまさねえよ」

文瑠の様子を見に行った千明は、座って雑誌を読んでいた茉莉に話
しかけた

「しょうがないでしょ、風邪も引いてたみたいだし・・・でも・・・」
茉莉は雑誌を閉じ、答えながら何かを考えていた。

「どうしたん？茉莉ちゃん」

そんな茉莉に気づいたことは話しかけた。

「ん〜ねえ、ことは・・・あの外道に落ちたって言ってた女の子・・・
どう思うっ?」

「いきなりどうした?」

茉莉が聞いたのを答えたのはことはじゃなく、流ノ介だった。

「あの子、元は人間って言ってたけどなんか、それ以外にもあるよ
うな気がして・・・」

「あ、それはうちも思ったわ。」

「やっぱりことはも?」

「うん・・・なんか、気配が違うって言うか・・・よお分からんけど
」

「俺も・・・なんかあいつに違和感を感じたんだよね」

「私もだ」

流ノ介たちは、侍なので気配が感じ取れる。

でも、気配は感じられても何が違うのかは完全には、判断できな
かった。

「とにかく、殿が起きたらこれからどうするか考えるぞ」

流ノ介が、場を締めくくるように言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7274m/>

残酷な運命の中の光

2011年10月7日14時33分発行